

# 美術科教育におけるポスターの学習について

大野和規\* 福田隆真\*\*

A Study on Learning of Poster in Art Education

Kazuki OHNO\* and Takamasa FUKUDA\*\*

(Received November 21, 1994)

キーワード：構成学習、デザイン学習、伝達表現、問題解決学習、系統学習、文化遺産  
美的感性

はじめに

美術科教育の教材は表現領域に大きく統括されてからも、絵画、彫刻、構成、デザイン、工芸の分野が残っているのが現状である。平面造形の表現として、絵画やデザインがあるが、同じ平面的な表現であっても、伝達目的の違いによって学習内容も異なってくる。絵画とポスターの違いは自己表現と目的表現にあるともいえる。本稿では、中学校美術科における文化遺産愛護を認識するポスターの学習を通じて、社会性のある伝達内容を美術科教育で育成する内容を、実際の授業をもとにして報告するものである。

## 1 美術科教育の教材としてのポスター

美術科教育の内容は戦後の学習指導要領の変遷を見ても分かるように、背景となる社会情勢や教育課程の指針によって変化してきている。例えば、戦後の社会の荒廃の激しい時代においては、個人の生活と社会生活の基盤作りと考えられるような工作的な内容が採り入れられていたし、昭和30年代の経済成長が始まった時点では、産業社会と工業生産に関連するデザインの領域が重視された。さらに、昭和50年代においては、それまでの高度経済成長からオイルショックを経て、ゆとりのある教育内容として既成の美術の表現領域とは異なった造形遊びが小学校の教育に導入された。そして、教育内容の精選をはかるために、絵画、彫刻、デザイン、工作・工芸といった従来までの領域に捉らわれないように、それらすべてを表現領域としての枠組みの組み替えが行われた。

美術科教育の目的には色や形を媒体とする美的な自己表現もあるが、学校教育として社会的な人間形成を行う場合、教科の役割として、社会参加という意味での美術の内容も想

\* 山口大学教育学部附属山口中学校

\*\* 山口大学教育学部美術教育講座

定できる。美術の学習といった場合に、私達が一番にイメージするのは絵画の表現であろう。それは幼児期からもっとも身近に描画という行為を通して慣れ親しんできたという、体験に基づくものであり、文学や音楽などの純粹芸術と並び称されるように、人間の精神の露呈・具体化という点で、最も明快と思われがちであることにもよっている。人間の発達として、描画は自己表現となり、同時に発達が進むに連れて、伝達行為となり得るものである。即ち、伝達の対象が無限定であった自己表現から、対象を想定した伝達表現が生じてくるのである。

ポスターの学習は言ってみれば、伝達表現と自己表現の融合された教材であると言えるであろう。学校教育の美術の役割として、人間形成や社会的人間の育成という教育内容を考慮すれば、ポスターの学習は伝達内容や伝達の対象を社会的に想定し、しかも表現内容に作者独自の世界観を盛り込むものであるから、美術の学習の中では客観性と主観的表現の調和のもとに構成された教材であると言える。

中学校の段階で、生徒を取り巻く環境や社会に対して問題意識をもって伝達のための美術表現を学習することは、社会的人間としての自立のための一助をなすものである。ポスターの学習はそういった広い教育的な配慮に基づいて、単に色や形の造形上の技法や技術の習得に終始するのではなく、身近に取り巻く生徒の社会的環境から、学校環境、地域環境、ひいては地球環境や国際社会といった一般社会に目を向け、伝達表現を通して、社会性を育成するものである。特に、知的発達が急速に進む中学生においては、生徒の興味や関心を助長し、積極的、主体的に学習意欲を高めるようなテーマを設定することで、ポスターの学習は美術における人間形成と美術の学習の両面的な特質を生かすことができる。

## 2 ポスターの教材の構成

ポスターの教材を学習するにあたって、デザインの学習と構成の学習の関係を位置づけしておく必要がある。ポスターは目的をもった造形表現の一つであり、その目的は伝達である。さらに細かく言えば、客観的に理解可能な伝達目的である。ポスターの表現を構成している要素、例えば、イラストレーション、パターン、写真表現、文字、レイアウト等が、単に自己の趣味や嗜好に基づくものではなく、伝達を想定する対象によって理解可能な表現をすることに学習の目的の一つがある。さらに、美術としての独自性ということから、作者の美的表現を加味した表現であることが望ましい。客観的理解と自己表現の調和による作品制作がポスターの学習の特質であるといえる。

こうした客観的理解と自己表現の調和をはかるために、構成の学習が介在すると考えられる。構成の学習は造形の基礎的内容の教育であり、表現領域にとらわれない普遍的な内容の教育でもある。造形要素や視覚言語として芸術表現の変革を担ったロシア・アヴァンギャルドやバウハウスの教育で確立されたこの普遍的内容は、学校教育においても有機的に機能するものである。つまり、美術の表現の全般に関わるファジーな性格をもった内容であるといってよい。しかしい、ファジーとはいえず、学校教育全体が文化財の伝授という一つの側面をもっているため、美術の学習においても基礎的で系統的な内容を設定する必要がある。

美術科の学習においても、教材の学習方法ということから、系統的学習と問題解決学習という2つの面が考えることができる。構成の学習は、いわば系統的学習である。造形の

要素や視覚言語は固定された内容ではなく、ダイナミックな局面をもつものであり、学習の方法という観点からすれば、色や形の系統性ということに特徴があるといえる。造形要素や視覚言語はその系統性を支えるものである。ポスターの学習はテーマを設定する段階から問題解決学習であり、生徒がポスターとして表現する内容を決定し、それを造形表現によって解決していくプロセスをとる。そして、こうした個々の問題解決学習の基盤となるのが系統的内容である。

中学校美術科での構成の学習は表現目的が絵画、彫刻、工芸、デザインに比べて抽象的であるのは、系統的内容を重視しているからである。例えば、絵画においては「風景画」「人物画」「静物画」「生活画」「構想画」のように表現のテーマが具体的である。中学生の段階ではイメージを想起させることにおいて具体的、具象的内容の方が自然な発想となり、日常的であるからである。そしてこれらのテーマを表現するにあたっては常に問題解決学習となるのである。問題解決学習は具体的であるから可能ともいえる。このことは絵画に限らずデザインにおいても同様である。個々の問題解決学習を通して、系統的内容を再確認したり、段階を進めたりすることが出来るのである。両者の関係はフィードバックをすることによって相乗効果をもたらすのである。そして、系統的内容は固定的なものではなく、常に問題解決学習の結果となる作品に対して、ダイナミックに働きかけることによって、表現の工夫や試みが生まれてくるのである。このようなことから、ポスターの教材を構成するものは、問題解決学習と系統的内容のフィードバックから生まれるものであるといえる。

### 3 「日本の美」のポスターの教材

中学校の美術科のポスターの題材に日本の美しさを選んだ。そして美術の教材を通して、自己表現にともなう美的感性を育成するとともに、日本の伝統的な美しさや文化財の愛護の心を養う題材を実践した。以下に、この題材の指導、学習過程と作品について述べる。

#### (1) 中学2年デザイン領域 「日本の美を考える」－文化遺産愛護ポスター－から

この題材は1学年のシンボルマークの制作の発展的学習としてのポスターの制作である。シンボルマークの制作では主観と客観とを初めて出合わせ、友達の視点から自分の表現を見直させることを試みた。ここでは、より客観性を高め、社会的機能やその必要条件を追究させることによって、それに応じた表現の仕方を考えさせることを授業のねらいとした。

文化遺産についての学習は、普通は鑑賞領域で取り上げられている。学習指導要領の第2・3学年には、「日本及び世界の文化遺産としての絵画や彫刻などに関心を深め、それらを尊重すること」「美術と人間のかかわりに関心をもち、時代、民族、風土、作者などの相違による美術のよさを味わう」とあり、美術史や知識的な理解に偏らないような配慮が必要であることが指摘されている。

また、ポスターの制作においては、何を伝えたいのか、また何を訴えたいのかを明確にすることが大切である。目的や内容を正確に伝え、印象的で人の心に訴えることができるポスターを制作するには、常に客観を意識していなければならない。そこで、「日本の美」という客観的な「美」を教材とし、鑑賞領域とデザイン領域を統合することによって、自らの「美的感性」を見直させ、表現の仕方を考えていかなることが出来るのではないかと

考えた。

①自分のとらえた「日本の美」をポスターで表現する学習

図1は薬師寺東塔をモチーフにしたポスターである。(図1参照)乱立するビル群と自然にたたずむ塔の対比で構成され、紙の二枚重ねとして描かれている。デザインとしての構成は今一步であるが、塔が描かれている紙が破れ下地のビルがのぞいている構成からは、歴史的建造物が破壊されようとする危機感が伝わってくる。ここに、この生徒の思い、すなわち、「文化遺産愛護」の精神が表れているといえよう。

ポスター制作においては、自分の思いつまり主観をどう人に伝えるかを工夫することが大切である。そこでまず、「どんなポスターにしたら思いが伝わるのだろうか」という問いを用意し、全体で話し合わせた。シンボルマークの制作を経験しているだけあって、「図柄やレタリングを工夫すること」「美しい配色にすること」「技法を効果的に用いること」など、表現を前提にした答えが返ってきた。

しかし、この時点ですぐポスター制作に入ったのでは良いポスターはできない。ポスターによって伝えたいこと、訴えたいことを表す内容がないからである。伝えたいこと、訴えたいことをもたせるために、日本の心について考えさせ、その後純粋に日本の美を鑑賞する学習を採った。文化遺産に寄せる日本人としての思いが後に表現の仕方を考えることに発展していくと考えたのである。

鑑賞活動ではできるだけ多くの日本の美術全集を用意し、十分な時間の保証をして生徒に鑑賞させた。ただ鑑賞させるのではなく、「美しい色、美しい形を発見する」ことを課題とした。色と形の面から「日本の美」を追究させようとしたのである。そうすることはポスターのデザインを考えることにつながると考えたのである。その後、自分が文化遺産として守っていきたいと思うものを一つ選択させ、その理由を考えさせた。

意識が高まった時点で、ポスターにとって大事な要素であるキャッチコピーを考えさせた。キャッチコピーはポスターの構成の中で特殊な位置を占める。なぜなら、自分の思いを言葉によって直接的に伝達したり訴えたりすることができるからである。このような特色をもつキャッチコピーの働きを十分につかませるために、文化遺産愛護に限らず、コマースなどのキャッチコピーも例として取り上げ、その働きについて考えさせ、自分のキャッチコピーを考えさせた。

モチーフとキャッチコピーが決定した後、ワークシートを用いてデザインの学習に入った。構成の学習は鑑賞学習で美しい形を探したことを基本とする。文化遺産をよく観察させ、1学年の平面構成の学習を思い起こさせながら、単純形、直線、曲線、なめらかな線、輪郭線、明暗などで単位形を見つけていかせた。

生徒のなかには、鋭い感覚で見つけたし単位形をもとにリズムやプロポーションなどの構成の要素を取り入れながら、日本らしさを醸し出すために全体的な秩序を考えて少しずつ構図を決定していこうとしているものも見られた。

レタリングや配色計画の過程にも日本らしさを取り入れるようにした。日本らしさを意識させることが、自分の伝えたいこと訴えたいことに対する意識の持続にもつながっていた。

彩色の段階では徹底的に技術の基礎基本に忠実に制作させた。一筆一筆に思いを込めるように指示した。

この学習は全過程において個別に自分の課題を追及させたが、話し合いの場もできるだ

け多く設定した。それぞれ違うモチーフを選んだ者同士が、互いの感性で気づいたことを述べ合い、見る側を意識させようと考えたのである。個人の中で、主観と客観とを出会わせ、広い視野、広い表現を追究させるためである。

図2は、キャッチコピー、塔のデザインをそれぞれ単独に見れば、そう強い印象を与えるものではない。(図2参照)しかし、両者が組み合わせられたこの作品は見る者の胸をハッとさせるインパクトをもっている。塔を天にそびえるように描いていること、その塔を中心にして「大切なもの」と「だから…」という言葉に分けるという構成によるものだと思われる。自分のとらえた日本の美に対するこの生徒の思いが、心を打つ作品として仕上がっている。

## ②自らの「美的感性」を客観的に見直す評価活動

「美的感性」とは、その人間独自の美的なものとのとらえ方、感じ方であるといえる。その「美的感性」を客観的に見直すということは、客観性というフィルターを通して見つけ直すということである。制作後の相互鑑賞も一つのフィルターであろう。しかし、この教材は個人追究であったために、自分の中にフィルターをもたなければならない。そこで、ポスター制作において、どれだけ見る側を意識して制作したかを自己評価させてみた。

ポスターを制作する上で大切な要素は、客観性に基ついたものが多い。それは、伝達機能が最優先するからである。モチーフに出合った時点では、私たちは感覚的、直観的な印象しか持てない。その主観的な思いを明確にし、それを伝達するために客観が必要になってくる。生徒自身が主観で感じたものが、どの時点で客観に変わったかを判断する方法として自己評価を工夫することは重要であるといえよう。

自己評価によって自分の変容の契機がしっかり認識できるならば、いろいろな教材において自分の「美的感性」を強く見直すことができ、高めるための方法も得ることができるであろう。

このポスターの制作を終えて、生徒の感想文に次のようなものがあった。「ポスターの役割とは、見る側に意図を理解してもらわなければならない。そのことで自分の美的感性を客観的に見れたのではないかと思う」とある。自分では「美的感性」はなかなか見えないものである。しかし、ポスターの制作という作業の中から見えてきたとっているのである。見る側に立った時、はじめて「美的感性」を自覚できたとしているのである。それは、自分の思いをどう人に伝えようかということの「どう」という部分に客観性が大きく働くからであろう。また、自分の思いが表れたかどうかという問題もポスターの制作では、しっかり見えてくるようである。

さらに、「ポスターの制作にあたっては、何人かの友達にアドバイスしてもらった。今思うとそれが友達の『美的感性』だったのではないかと思う」と述べている。ポスターの制作という個人作業だけでなく、他者の「美的感性」と触れることで、客観性を身につけていったことがわかる。

自分の「美的感性」を自覚した時、それは「美的感性」が一段高まった時であるともいえるであろう。自己評価表や感想文という評価活動が有効であったといえよう。

## (2) 「文化遺産愛護ポスター」学習の流れ

### ●第1次(1時間)

#### ○学習内容及び学習活動

- ・「日本」らしさについて考える。
- 教師のおもな援助活動
  - ・「日本」をいろいろな視点からイメージさせ、広く「日本」らしさを捉えさせる。例えば、生活、経済、言語、文化、交通、宗教、産業、祭、環境、建物、行事、地理、観光、文学、歴史など。
  - ・日本人の心を意識させたい。
  - ・次時の鑑賞学習に思いをつなげる。
- 第2次（2時間）
  - 学習内容及び学習活動
    - ・日本の文化遺産を鑑賞し、人々の思いを探る。飛鳥文化、白鳳文化、天平文化など。
  - 教師のおもな援助活動
    - ・資料をもとに時代背景をふまえながら京都と奈良に限定して鑑賞させる。
    - ・OHPと副読本を使用し、いろいろな建造物や仏像などを紹介し説明を加える。
    - ・その時代の人々の思いが文化遺産に大きく反映していることを理解させたい。
    - ・文化遺産を守ってきた人々の思いを感じとらせる。
    - ・あくまでも鑑賞の授業として展開していく。
- 第3次（1時間）
  - 学習内容及び学習活動
    - ・鑑賞の学習をもとに自分が一番思いを寄せた文化遺産を選ぶ。
  - 教師のおもな援助活動
    - ・ポスターの素材にふさわしいものを選ばせる。
    - ・文化遺産を愛護するという観点から決定させる。
    - ・自分の思いを注入できるものを選ばせる。
    - ・ワークシートを使用し決定理由を明確にさせる。
- 第4次（1時間）
  - 学習内容及び学習活動
    - ・ポスターについて考える。
  - 教師のおもな援助活動
    - ・ポスターの諸条件について考えさせる。目的（主題・内容）、構成（レイアウト）、レタリング（コピー）、表現技法など。
    - ・グループ活動を取り入れ、いろいろな角度から考えさせる。
- 第5次（2時間）
  - 学習内容及び学習活動
    - ・自分が選んだモチーフを構成する。
  - 教師のおもな援助活動
    - ・構成の方法を理解させ、構成させる。シンメトリー、リピテーション、バランス、リズムなど。
- 第6次（8時間）
  - 学習内容及び学習活動
    - ・思いをより強く表現できる配色計画を立てる。
    - ・着色する。

○教師のおもな援助活動

- ・意図的な配色計画を立てるように留意する。
- ・色の感情や配色のポイントを再度おさえる。
- ・着色の基本的な技術を再確認させ着色させる。ポスターカラーの性質、平ぬりや溝引きの方法など。

●第7次（1時間）

○学習内容及び学習活動

- ・完成作品を発表し、相互鑑賞をする。

○教師のおもな援助活動

- ・友達の作品のよさを発見し、制作をふり返らせる。
- ・鑑賞のポイントを明確にし、鑑賞カードに記入させる。

(3) 作品について

前述のような授業の流れを通して、生徒たちは文化遺産について認識を新たにし、ポスターの制作を行った。その中からいくつかの例を以下に紹介する。

図1は近代建築と文化遺産を画面上に重ね合わせて、文化遺産の愛護の大切さを強調している。近代建築の上にポスターを張り付けたようなイメージが面白みと意外さを与えている。図2では下から見上げるように建物の角度を変えてみることで、文化遺産の威厳を表現している。図3は金閣寺を輪郭線で描き、押し寄せる現実を表現している。図4は産業社会の発展のシンボルとして工場の煙突と古い建物を重ね合わせて、文化遺産愛護と日本人の心を表現している。図5は千手観音の一つの腕で文化遺産愛護を訴えている。図6では仏像に感情移入して、目に映るシルエットと涙で文化遺産の愛護を表現している。図7では古都の風景を直線と円によって構成し、文化遺産の美しさを表現している。

付記

本稿の一部は、大野和規「生徒自らが美的感性を豊かにしていく授業－美的感性の磨き方－」（山口大学教育学部附属山口中学校研究紀要第38号「生きていく力としての学力を育てる授業－教科の本質に基づく授業をつくる－」収録）山口大学教育学部附属山口中学校、1994年5月、をもとにした。なお、本稿は1、2を福田、3を大野が担当した。



図 1



図 2



図 3

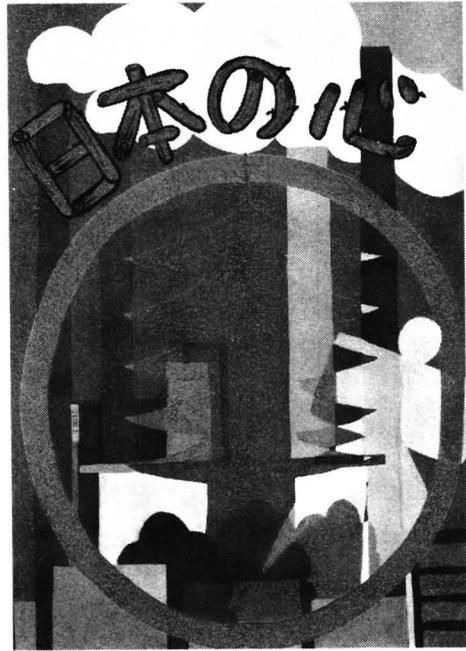


図 4



図 5

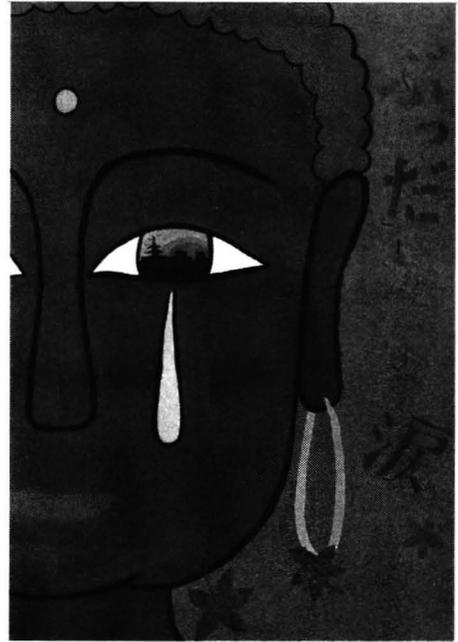


図 6



図 7